



第三種郵便

月刊医科器械 特集号

鉤と言えばケント鉤！

『ケントレトラクターの知られざる真実』

限定配布・永久保存版

還付先

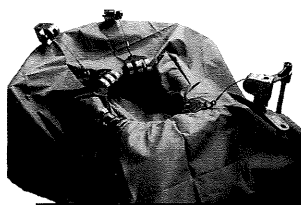
医科器械出版社

〒344-0063

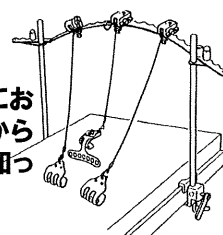
埼玉県春日部市緑町2-8-6

TEL 048-734-1645

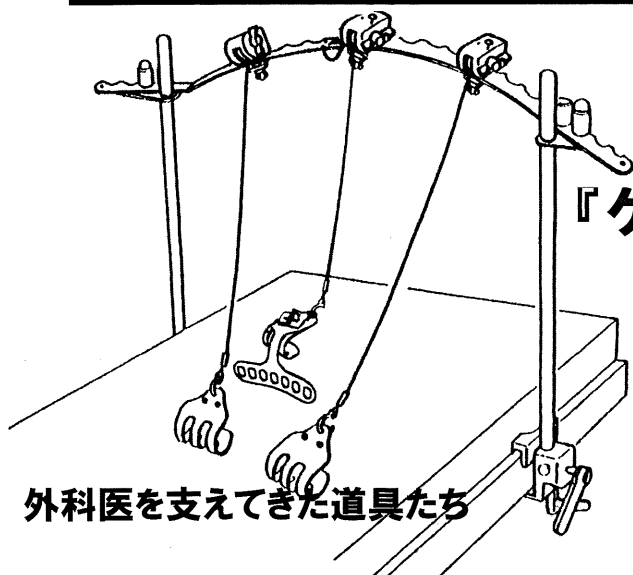
FAX 048-738-3861



「鉤と言えばケント鉤」と言われるほど、ケントレトラクターは外科手術における、スタンダードな選択となっている。ケントレトラクターが誕生してから既に30年。実はこの製品はある日本人医師が発明したものである。知っているようで知らないケントレトラクターの真実を徹底取材する。



鉤と言えばケント鉤！



外科医を支えてきた道具たち

『ケントレトラクターの 知られざる真実』

外科医は患者のため常に知識や情報を獲得し、日々、自らの腕を磨きあげている。いざ手術となればこれまで積み重ねてきた経験や知識を総動員し、また、五感のすべてを極限まで高め臨む。外科医たちはいつも真剣勝負を強いられている。そんな医師たちを支えているのが、さまざまな道具類である。手術の現場で使用される道具は、外科医たちにとって、自らの手といっても過言ではない。刀類や剪刀、鉗子などは、まさにそんな道具だ。いくら医療が高度先進化しても、これらの道具に向けた本質的な要求は変わらない。

『自分の思い通りの機能を発揮してくれる使い勝手の良さ』である。術者にとっては、これがすべてだ。

鉤と言えばケント鉤

さて、手術を確実に成功させるために、必要不可欠な、きわめて重要な道具がもうひとつある。それは最適の術野を確保するために用いられる、いわゆる『鉤』である。かつては開創は鉤を用いて、助手の手で行われていた。その当時は「鉤引き三年」とも言わ

れ、手術においてはきわめて重要な補助業務であるのと同時に、長時間の手術においては、過酷な業務でもあったと言う。しかし、現在は鉤引き三年の言葉を聞くことはない。なぜなら今は「鉤と言えば、ケント鉤」と誰もが思い浮かべるほど、ケントレトラクターと呼ばれる開創器が一般化しているからだ。この道具を使用すれば、あらゆる術式に適合した術野の確保が行える。ケントレトラクターが存在しないことを想像すれば、この製品がいかに画期的なものであるかを容易に理解することができる。その恩恵を改めて認識することは少ない。なぜならケントレトラクターはあってあたりまえの道具になっているからだ。それゆえに、私たちはまだ、この道具について知らないことがたくさんあるようだ。そのひとつがケントブランドの由来である。

日本人が開発したケントレトラクター

ケントレトラクターが誕生したのは約30年前。そしてこのケントの名称にはある日本人の医師の名前が隠されている。ケントレトラクターを開発したのは、現、東京女子医科大学名誉教授である高崎健氏。KentにはKen Takasakiの名前が隠されていたのだ。もちろん多くのベテランの外科医たちは本邦において開

発された製品であることも、それが高崎氏であることもよく知られている。反面、若き外科医の中には、手術であたりまえに使用している、このなくてはならない便利な道具が、ひとりの日本の医師により開発されたことを知らない人もいる。



高崎健名誉教授

高崎氏は食道癌手術の先駆者であり、世界的な権威として知られる、外科医 中山恒明氏の最後の弟子である。高崎氏は師である中山恒明氏の功績を引き継ぐように、その匠の技を継承・進化させていった。さまざまな術式の考案と同時に数々の医療機器も開発してきた中山恒明氏と同様に、高崎氏も数多くのユニークな医療機器の開発を行ってきた。その代表的なものがこのケントレトラクターである。そもそも実施困難な食道癌手術症例があり、その手術を実行するために必要にかられて考案したのがこの製品であったと言う。

ケントレトラクターの本当の実力

ケントレトラクターは、自在な方向からの牽引が行え、良好な術野の展開が可能であることが最も大きな特徴としてよく知られている。また、術中にも牽引位置や牽引の強さをストレスなく変更することができ、最良の手術が行えるように常に術者をサポートすることができる。

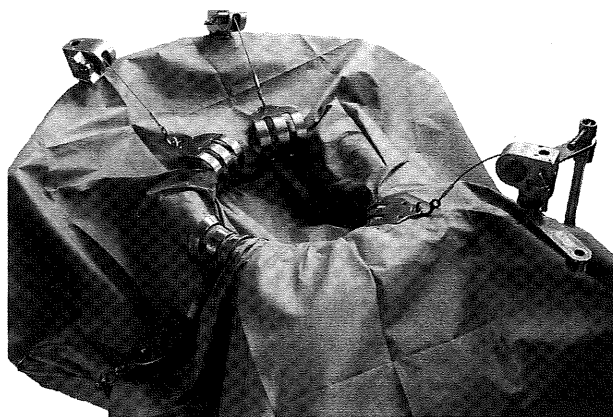
ケントレトラクターセットはこうした特徴を生かすために、さまざまな工夫が施されている。創部を保持する弁部を伸縮自在なワイヤーで牽引する基本機

能はもちろんのこと、弁やそれを支えるアーチ型バーの形状や角度、位置、部品の硬度などにも数多くの工夫が施されている。そして術者にそのさまざまな工夫を意識させることはない。術者に提供するものは、あくまでも良好な術野そのものである。またこうした工夫のすべてが、高崎氏の臨床経験から生まれたものである。

こうしたバックグラウンドがあり誕生した製品であることから、形状だけをまねた類似製品では、高崎氏がめざした本質的な動きは再現できず、結果としてこれらの製品は、そのほとんどが淘汰されてしまったと言う。

ケントレトラクターの知られざる恩恵

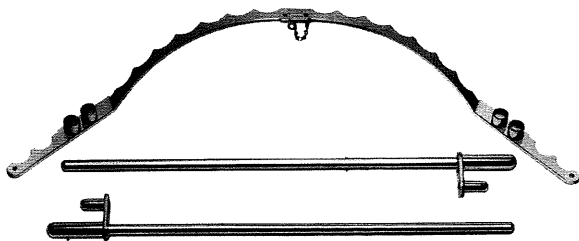
さてケントレトラクターには知られざるさらに重要な特徴がある。実は術者である医師が意識していないだけで、手術の準備を行うスタッフたちにとっては大きな恩恵を与えているという。それは滅菌をする部品がきわめて少ないこと。極端に言えば滅菌しなくてはならない部品は手のひらにさえ乗ってしまう。しかも、それらの部品はいよいよ開創を行う段階でセットすればよい。



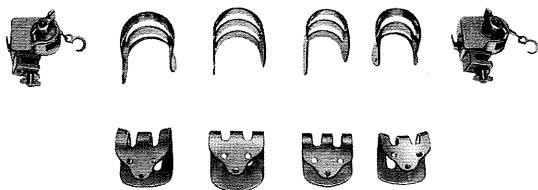
大きな部品である支柱とアーチ型バーは術前に手術台に取り付けることができ、さらに患者と共にドレープで覆うことにより、これらの部品は滅菌を行う必要がない。切開が行われ開創が行われる段階でま

ず、滅菌された牽引器をドレープの上からアーチ型バーに取り付ける。さらに弁を開創部の最適な位置に取り付け、牽引器のワイヤー部のフックを掛け、あとはワイヤーを巻き取り、牽引を行うだけである。前述の通り術中に位置を変えることも、牽引の強さを変えることもできる。

こうしたスタッフにとっての使い勝手の良さは手術の効率化にも繋がり、これからの病院運営には欠かせない要素である。



滅菌が不要な部品

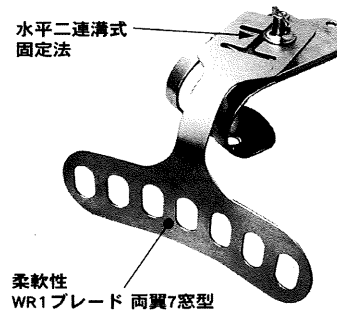


滅菌をする部品

さらにアーチ型バーを足側にセットすれば下腹部や骨盤内手術にも使用可能である。また、オプション部品も豊富でケントブーメランやケントサイドレトラクターなどを用いた補助的な牽引も可能である。

進化するケントレトラクター

ケントレトラクターはいまだ進化を続けていると言う。約1年前から発売を開始した、ケントウイングレトラクターは弁と柔軟なブレードを一体化させた製品である。特に上腹部の手術において、肝臓などの臓器を人の手を使わず、圧排することができる。ブレードは



両翼7窓型、片翼3窓型を自由に組み合わせることができる。また、ブレードは外すことなく圧排位置を自由に変更することができる。

「外科は楽しいぞ」

高崎氏はケントレトラクターだけでなく、これまでさまざまな医療機器の開発を行ってきた。それは師であった中山恒明氏の影響も大きいと言う。だが同時にどんな小さな工夫や改良が施されたものでも、自分の道具があれば手術はそれだけで楽しくなると語る。それは多くのスタッフに支えられながらも、究極は孤立無援な真剣勝負の世界を生きてきた、外科医だからこそ感じる道具への特別な想いなのかもしれない。現在、医師不足が叫ばれ、外科を希望する学生が減少する中で、これから高崎氏は学生たちにこう伝えていきたいと話す。

『外科は楽しいぞ』

それは医師としての使命を達成できる喜びに他ならない。ケントレトラクターはこれからも多くの医師の志を影で支えていくにちがいない。

(了)

取材協力:

東京女子医科大学 高崎健名誉教授

高砂医科工業株式会社

TEL03-3812-2668